

旅立ち

お話を聞く前に、山本さんの略歴を簡単に述べておこう。警察官僚の父と商才に長けた母との間に生まれた。小学校4回、中学校で2回の転校を繰り返して、高校は中退して慶應義塾大学の通信教育を受けていた頃、日航機が群馬県の御巣鷹山（おすたかやま）に墜落するという事件が勃発した。その悲惨なニュースが毎日のように日本中に流れていた。それを聞くや、直ちに彼はキリスト教の洗礼を受けた。聖職者になろうと上智大学の神学部に入り直したのである。彼は今、カトリックの宗教科教職資格を持っている。

国立がんセンター中央病院小児病棟の子どもたちとその親を支えるボランティアを始めたのもちょうどその頃だった。今を去ること15年ほど前のことである。全国各地から子どもを入院させるために上京はしてきたものの、付き添う母親たちのための宿泊施設がなかった。アメリカではマクドナルドハウスとよばれ、ごく普通に存在しているのに。

わが子の命の明日をも知れない親たち、雨露しぐ場所を見つけてあげたい

チーム医療の
パートナーを知りたい!

Coメディカル ステーション

第3回

在宅ホスピス施設長編

簡易宿泊所の立ち並ぶ台東区・山谷（現：清川）のドヤ街に徒手空拳でホスピス「きぼうのいえ」を建てた若者がいる。本人は怒るかもしれないけれど、看護師の夫人ともども、身寄りがなく回復する見込みのない病人を同じ敷地内で寝食をとともにしながら支えている山本雅基さんは「医療協同従事者」に違いない。

と心から思い、ファミリーハウスを作る運動に飛び込んだのが28歳の頃でした。山本さんは述懐する。10年間にも及ぶ活動の結果、1998（平成10）年度の補正予算で約20億円がついた。定年退職後の人が多い中で、若者は彼ひとりだった。すでに彼がいなくても組織は勝手に動いていた。彼の役割は終わったのである。

芽ばえ

うしてこのお仕事を始められたのですか。

約 10年間のボランティア活動で、何をやるにも医師の顔色をうかが

がわなければいけないことに嫌気がさしたんです。その時、山谷のホームレスの人たちのことを聞き、わが身に照らして彼らを他人と思えなかった。かつて私もお酒にやられていたことがありまして、挫折した人間がどんなに簡単にアルコール依存症になるか知っています。そのうえ、商売人になれない人間が生活の糧を断たれた時、いわゆる住所不定、無職となります。ほら、小さい頃、公園で捨てられていた猫をみんなでかまったりしたことがおありでしょう。給食の残りをあげたりして遊んでいるうちに、1人帰り、2人帰り、そして誰もいなくなる。仕方がない

から猫を連れて家に帰る。とたんに家のものから捨ててこいといわれる。大人って、どうしてこんなに薄情なんだ。

自分は決して薄情な大人になんかならないぞって思う。また、その頃、だいぶ少なくなっただけだけれど、休みの日にはよく盛り場などで傷痍軍人がアコーディオンを弾いていました。なんでこういう人がいなければならぬのか。それやこれやの思いが、大人になっても消えずに、今のようになつたのかもしれない。私がおろか宗教的な雰囲気すらありませんでした。

隅田河畔を歩きながら、倒れている人につつかる。「かわいそうに」ではなく、自分もいつ立場が替わるかわからない。なんとかしなければと思う。そう思いつつ駆けずり回っているうちに立ち上がったのがここです。

回帰

「ミナルケア」という言葉があります。

こは「生き直す」場所です。ターミナルケアは、死を迎えるための言葉です。似て非なるものです。



●「きぼうのいえ」施設長
山本雅基さん

このままではまずいと思った魂が、環境を整えてもう一回生き直そうとした時、それにふさわしい場所を提供しようというわけです。それはまた、自分の「生き直し」にも通じます。人生は、決してやり直しがきかないものではありません。

例えば死ですが、はたしてそこですべてが終わってしまうのでしょうか。人間の心の成長をグラフにしてみましよう。一方に成長軸をとり、他方に時間軸をとった場合、はるかに高められた精神は、死によっていきなり断ち切られるのじゃなくて、その過程を突破したかなたに希望を見るのもよいではありませんか。少なくとも、私はそう信じています。深い諦観に彩られた人生ならともかく、

生き直す意味もここにあたりにあるのではないのでしょうか。

亡くなっていく人を見守っている時、言い知れぬ恐怖感にとらわれることがある。死の顔貌と月に一度は会います。それは恐ろしいものです。そして、火葬場へ行きそれを茶匙に付す。そんなことを繰り返しているうちに、ある日ふと思

い当たった。そうか、人間はどこかへ帰って行くのか、お疲れさまでと言わなければならない。と。死を越えていくのです。仏教でもいい、キリスト教でもいい、信じていようといまいと、ともかくあなたは帰るのだ。

在宅 ホスピス

繰り返しになるかもわかりませんが、山谷を特に選んだ理由をお聞かせください。

看

取ってくれる家族がない、告知を受けていない、生活保護を受けている、病気に對する理解が足りないなど、山谷に、それなりの理由で住んでいる人には、ホスピスに対する少なからぬハンディキャップがあります。ただ、ここでわかったことは、い

わゆる通常のホスピス以外の、在宅ホスピスケア対応型の集合住宅というのは、まさに山谷こそうってつけなのではないことでした。身寄りのない人が肩寄せ合って過ごしていて、家族のような立場の人が私たちのようにスタッフとして一緒に住んでおり、そこへ在宅のホスピスが訪ねてくる。そんな集合住宅を、山谷以外どこが喜んで迎えてくれるでしょう。人々は、あたかも産業廃棄物処理場を造られるかのように、忌避しました。

ここは、ホームレス状態にない人でも、例えば単身者で高齢の人は人れます。東京都、新宿区、中央区、台東区、墨田区、荒川区の福祉事務所が病院のソーシャルワーカーを経由して来る人が多いようです。病診連携なので通院者はいません。最期を迎える人は、圧倒的に末期癌の方ですが、緩和医療で

痛みを攻めながら、あまり苦しまないようにと先生方にお願ひしています。苦しみが始まってからは、緩和になりませんから。



「きぼうのいえ」外観。
この家を銀行からの借金だけで建てた。



「いのりの部屋」は屋上にあった。引き取り手のない骨盤が置かれている。